

東西方言対立語からみた『書言字考節用集』の性格

佐藤貴裕

藤  
貴

裕

要旨

本稿は「書言字考節用集」の位置付けを、東西方言対立語の調査によって試みたものである。

に引用されることがある。が、本書の成立・刊行は、近世前期に属しているから、東国語形を收載する可能性はほとんどないはずである。そこで、この二つのことを、次のように解釈し

A うるかどうかを検討する必要が生じる。  
『書言字考』の東国の語形は、前代までの資料から引用

たものであつて、方言形を収載したのではない。

B 東国語形の収載は『書言字考』だけでなく他の近世節用集にもみられる。

a そこで、東西方言対立語（東国の語形は上方出自でないものの）の収載状況を、他の節用集も含めて調査した。その結果、次のようなことが明らかになった。

b 「書言字考」は、前代までの資料からの引用でない、その意味で純粹の東国の語形を収載している。

a のような現象は他の節用集では見られなかつた。ただし、一八二〇年以降の節用集はこの限りではない。

に焦点を絞って考察していくたい。

この語形の早い例として『書言字考』を挙げることがしばしば見られる(トモロコシ玉蜀黍・コケ鱗など)。このことから『書言字考』が東国<sup>注3</sup>の語形を収載していることが予想される。しかし、『書言字考』の成立・刊行は元禄・享保であって、当時の上方語の勢力を考慮すると江戸語形の収載は極めて例外的なことと思われる。さらに、辞書における規範性の追求・強い書承性を考えると、江戸語形の収載は不可能であるとすら思われるのである。

に考えるほかなかろう。

方（京都）語であり、江戸で使用されていた語形は上方から地理的に伝播してきたものであって、外見上江戸語形を収載したように見えるに過ぎない。

られる現象である。この二つのどちらかによつて説明できないときに、例外を例外として認める説明、

③「書道の癡」では、何らかの要因あるいは必然があつて江戸語形を收載している。 という可能性を検討することになろう。したがつて、本稿では①②を検討し、③が認められるか否かを吟味していくことにする。

二ノ法と資料

ます 仮説①を検討するためには、「書言字考」における東西対立語の収載状況を調査する。ただし、その江戸語形は上方出自でないものとする。それは、非上方出自の江戸語形の収載が確認されれば、仮説①は説明として有効ではないと判断されるからである。

東西対立語は、主として近世の方言書・隨筆から、東西での対立が明記されている語を選んだ。さらに、収集資料の編著者の誤解や誤記によるものを除くため次のような採用基準を設け、a ~ d、あるいは、a ~ eまでを満たした語を最終的な調査語とした。

**b** その上方語形が江戸で使用されないもの（江戸に伝播しなかつたと思われるもの。前田勇編『江戸語大辞典』による）。

**c** また東国語形が上方で使用されないものの（同編）『近世上方語辞典』による）。

e 例 言形が「方由自でないこと」(『日本国語大辞典』による)。ただし、上方出自であっても、近世前期では『書言字考』にしか用例のないものは採用する。

図からも調査語を取り、分布の上からa～cがある程度察せられるので、dかeに適合するものを採用した)。

考  
え  
る  
上  
で  
、  
検  
討  
す  
る  
価  
値  
が  
あ  
る。  
そ  
こ  
で  
、  
東  
西  
対  
立  
語  
の  
収  
載  
状  
況  
を  
比  
較  
す  
る  
た  
め  
、  
筆  
者  
が  
身  
近  
に  
調  
査  
し  
う  
る  
近  
世  
節  
用  
集  
か  
ら  
二  
本  
を  
選  
んだ  
。そ  
の  
際  
、  
前  
田  
富  
祺  
『  
語  
彙  
研  
究  
資  
料  
と  
す  
て  
の  
節  
用  
集  
』  
を  
参  
考  
に

し、収載語数の多いこと（『書言字考』と同等以上であること）、任意の二本間で収載語の類似が強く目立たないことなどに注意した。

## (1)節用集大全

惠空編 延宝八（一六八〇）年

## (2)合類節用集

若耶三胤子編 延宝八年

## (3)真草二行節用集

編者未詳 貞享三（一六八六）年

## (4)古文頭書大益節用集綱目

苗村丈伯編 元禄三（一六九〇）年版

## (5)大成正字通

編者未詳 享和一（一八〇一）年版

## (6)大全早引節用集

編者未詳 文化一四（一八一七）年版

## (7)多方絵引節用集

秋里離島編 文政七（一八二四）年版

## (8)蘭例節用集

広川辭編

文化二二（一八一五）年

## (9)増廣倭節用集悉改大全

音訓 侯野通尚編 文政九（一八二六）年

## (10)大成無双節用集

鶴峰戊申編 嘉永二（一八四九）年

## (11)早万代節用集

宮田彦弼編 嘉永三（一八五〇）年（三冊本）

## (12)江戸大節用海内藏

高井蘭山編・中村経年補 文久三（一八六

## (13)年

版（三冊本）

## (14)古文頭書大益節用集綱目

苗村丈伯編 元禄三（一六九〇）年版

## (15)两点正字通

編者未詳 享和一（一八〇一）年版

## (16)萬方引節用集

秋里離島編 文政七（一八二四）年版

## (17)多福絵引節用集

文化二二（一八一五）年

## (18)蘭例節用集

広川辭編

文化二二（一八一五）年

## (19)増廣倭節用集悉改大全

音訓 侯野通尚編 文政九（一八二六）年

## (20)字便引節用集悉改大全

两点 侯野通尚編 文政九（一八二六）年

## (21)古文頭書大益節用集綱目

苗村丈伯編 元禄三（一六九〇）年版

## (22)大成正字通

編者未詳 享和一（一八〇一）年版

## (23)大全早引節用集

編者未詳 文化一四（一八一七）年版

## (24)多方絵引節用集

秋里離島編 文政七（一八二四）年版

## (25)蘭例節用集

文化二二（一八一五）年

## (26)増廣倭節用集悉改大全

音訓 侯野通尚編 文政九（一八二六）年

## (27)字便引節用集悉改大全

两点 侯野通尚編 文政九（一八二六）年

## (28)古文頭書大益節用集綱目

苗村丈伯編 元禄三（一六九〇）年版

## (29)大成正字通

編者未詳 享和一（一八〇一）年版

## (30)大全早引節用集

編者未詳 文化一四（一八一七）年版

## (31)多方絵引節用集

秋里離島編 文政七（一八二四）年版

## (32)蘭例節用集

文化二二（一八一五）年

## (33)増廣倭節用集悉改大全

音訓 侯野通尚編 文政九（一八二六）年

## (34)字便引節用集悉改大全

两点 侯野通尚編 文政九（一八二六）年

## (35)古文頭書大益節用集綱目

苗村丈伯編 元禄三（一六九〇）年版

## (36)大成正字通

編者未詳 享和一（一八〇一）年版

## (37)大全早引節用集

編者未詳 文化一四（一八一七）年版

## (38)多方絵引節用集

秋里離島編 文政七（一八二四）年版

## (39)蘭例節用集

文化二二（一八一五）年

## (40)増廣倭節用集悉改大全

音訓 侯野通尚編 文政九（一八二六）年

## (41)字便引節用集悉改大全

两点 侯野通尚編 文政九（一八二六）年

## (42)古文頭書大益節用集綱目

苗村丈伯編 元禄三（一六九〇）年版

## (43)大成正字通

編者未詳 享和一（一八〇一）年版

## (44)大全早引節用集

編者未詳 文化一四（一八一七）年版

## (45)多方絵引節用集

秋里離島編 文政七（一八二四）年版

## (46)蘭例節用集

文化二二（一八一五）年

## (47)増廣倭節用集悉改大全

音訓 侯野通尚編 文政九（一八二六）年

## (48)字便引節用集悉改大全

两点 侯野通尚編 文政九（一八二六）年

## (49)古文頭書大益節用集綱目

苗村丈伯編 元禄三（一六九〇）年版

## (50)大成正字通

編者未詳 享和一（一八〇一）年版

## (51)大全早引節用集

編者未詳 文化一四（一八一七）年版

## (52)多方絵引節用集

秋里離島編 文政七（一八二四）年版

## (53)蘭例節用集

文化二二（一八一五）年

## (54)増廣倭節用集悉改大全

音訓 侯野通尚編 文政九（一八二六）年

## (55)字便引節用集悉改大全

两点 侯野通尚編 文政九（一八二六）年

もある。それは、「鱗」字にメハザツコ（静嘉堂文庫本）・メハシヤコ（元龜二年本）という訓をも付しているからである。これらの語形を「物類称呼」は目高の関西方言としており、用字が意義の仲立ちをしていくとすれば、「運歩集」のキスは目高である可能性すらあるのである。<sup>14)</sup>

さらに、「運歩集」は、一段動詞の一段化や形容詞終止形をシシリ<sup>15)</sup>語尾とするなど、当時の辞書としては規範的でない面が目立つといふ報告もある。これらのことから、「運歩集」のキスの例によって、上方でキス鱗が使用されたとするのは危険であり、「書言字考」のキスの出自も上方語以外のものに求めたほうがよさそうだと考えられるのである。

(3)ツムジ旋毛 和名類聚抄・類聚名義抄・色葉字類抄

ツムジは院政・鎌倉初期までの資料に見られ、これ以降はツジばかりが見られるようになる。よって、「書言字考」が先行資料から引用したとすれば、鎌倉初期までの資料からと考えられる。その中で

は、高梨信博氏は出典注の出現頻度から「書言字考」は「国書では『和名類聚抄・日本書紀・万葉集』の三書の引用がもっとも多い」とされるから、「和名抄」に依った可能性が最も高そうである。確かに、ほとんどの先行節用集が旋毛を支体門に收めるのに對し、「書言字考」では氣形門に收めていて、「和名抄」の牛馬類にならつたようにみられる。また用字の廻と同様兩者通用されることがあり、大きな差ではない。

廻毛 翠雅注云廻毛一云旋毛<sup>16)</sup>（和名部）（元和本和名抄一一一三）

調査の際、原則として右訓のみを収載語として認めたが、左訓が著しく少ないためにかえって目立つ本では左訓をも採つた。これは、少なからず検索の便ともなりうると考えたためである。したがつて、左訓の頭字が右訓のそれと一致するときだけ採用した。また、一方の方言語形の注となっている他方の語形をも採つた。が、双方とも二、三語に過ぎない。

三 「書言字考」収載の江戸語形

調査の結果、「書言字考」に収載された江戸語形は、一二三の調査

版（三冊本）

(10)大成無双節用集 鶴峰戊申編 嘉永二（一八四九）年

(11)早万代節用集 宮田彦弼編 嘉永三（一八五〇）年（三冊本）

(12)江戸大節用海内藏 高井蘭山編・中村経年補 文久三（一八六

三）年

(13)年

(14)古文頭書大益節用集綱目 苗村丈伯編 元禄三（一六九〇）年版

(15)两点正字通 編者未詳 享和一（一八〇一）年版

(16)萬方引節用集 編者未詳 文化一四（一八一七）年版

(17)多方絵引節用集 秋里離島編 文政七（一八二四）年版

(18)蘭例節用集 広川辭編 文化二二（一八一五）年

(19)増廣倭節用集悉改大全 音訓 侯野通尚編 文政九（一八二六）年

(20)字便引節用集悉改大全 两点 侯野通尚編 文政九（一八二六）年

(21)古文頭書大益節用集綱目 苗村丈伯編 元禄三（一六九〇）年版

(22)大成正字通 編者未詳 享和一（一八〇一）年版

(23)大全早引節用集 編者未詳 文化一四（一八一七）年版

(24)多方絵引節用集 秋里離島編 文政七（一八二四）年版

(25)蘭例節用集 文化二二（一八一五）年

(26)増廣倭節用集悉改大全 音訓 侯野通尚編 文政九（一八二六）年

(27)字便引節用集悉改大全 两点 侯野通尚編 文政九（一八二六）年

(28)古文頭書大益節用集綱目 苗村丈伯編 元禄三（一六九〇）年版

(29)大成正字通 編者未詳 享和一（一八〇一）年版

(30)大全早引節用集 編者未詳 文化一四（一八一七）年版

(31)多方絵引節用集 秋里離島編 文政七（一八二四）年版

(32)蘭例節用集 文化二二（一八一五）年

(33)増廣倭節用集悉改大全 音訓 侯野通尚編 文政九（一八二六）年

(34)字便引節用集悉改大全 两点 侯野通尚編 文政九（一八二六）年

(35)古文頭書大益節用集綱目 苗村丈伯編 元禄三（一六九〇）年版

(36)大成正字通 編者未詳 享和一（一八〇一）年版

(37)大全早引節用集 編者未詳 文化一四（一八一七）年版

(38)多方絵引節用集 秋里離島編 文政七（一八二四）年版

(39)蘭例節用集 文化二二（一八一五）年

(40)増廣倭節用集悉改大全 音訓 侯野通尚編 文政九（一八二六）年

(41)字便引節用集悉改大全 两点 侯野通尚編 文政九（一八二六）年

(42)古文頭書大益節用集綱目 苗村丈伯編 元禄三（一六九〇）年版

(43)大成正字通 編者未詳 享和一（一八〇一）年版

(44)大全早引節用集 編者未詳 文化一四（一八一七）年版

(45)多方絵引節用集 秋里離島編 文政七（一八二四）年版

(46)蘭例節用集 文化二二（一八一五）年

(47)増廣倭節用集悉改大全 音訓 侯野通尚編 文政九（一八二六）年

(48)字便引節用集悉改大全 两点 侯野通尚編 文政九（一八二六）年

(49)古文頭書大益節用集綱目 苗村丈伯編 元禄三（一六九〇）年版

(50)大成正字通 編者未詳 享和一（一八〇一）年版

(51)大全早引節用集 編者未詳 文化一四（一八一七）年版

(52)多方絵引節用集 秋里離島編 文政七（一八二四）年版

(53)蘭例節用集 文化二二（一八一五）年

(54)増廣倭節用集悉改大全 音訓 侯野通尚編 文政九（一八二六）年

(55)字便引節用集悉改大全 两点 侯野通尚編 文政九（一八二六）年

語のうち二語であった（表一）を参照）。このうち、先のa～dに適合したものが九語もあるので、仮説①は成り立たないようである。さうに、a～eに適合した三語について前代までの資料から引用した可能性を検討してみよう。

(1)コケラ鱗 天正狂言本（『日本国語大辞典』の挙例。以下同じ）

『天正狂言本』では「ちる花はさながらいたいのこけらかな」とな

つている（連歌の十徳。表章『日本古典全書 狂言集』下）。が、『天正狂言本』は、表章氏が東北在住の狂言師の手になつたと推定され

ているので、上方で書写されたもので確認すると「ちる花はたいのう

ろこにさもにたり」（大蔵虎明本。池田廣司・北原保雄『虎明本狂言集の研究本文篇』上）と上方語形を用いており、天正本とは対立してい

るのである。それに、天正本は東国語的特徴の目立つものであるから、このコケラの例をもつて上方で使用されたと考えるのは穩當ではな

い。『書言字考』のコケラも上方語としてではなく江戸（東国）語形として収載されたと考えられるのである。

(2)キス鱗 運歩色葉集 天文一七（一五四八）年成立  
『運歩集』（静嘉堂文庫本・元龜二年本ともに「鱗」字にキスを付しておらず、「魚之名」）、『運歩集』の影響が推定される弘治二年本節用集や永禄二年本・堯空本・経亮本・相園本・天正一七年本などの印度本節用集も同様である。が、『書言字考』は「鱗殘魚」を用いる『節用集大全』（合類節用集）も同様字に上方語形キスゴを付しているので、用字の上からは、『運歩集』や印度本節用集などから引用した痕跡は認められない。

また、『運歩集』のキス自体、鱗を意味するのかどうか疑わしい面

このようすに語形の一致だけではなく他の面からも影響の深さを傍証する事象が見られるので、『和名抄』から引用した可能性はかなり高そうである。が、これらの事象が先行節用集の影響でないことを確認しなければ、性急に認めるとは避けたい。特に『合類節用集』などは『書言字考』と深い関わりがあるようだから、この検討は是非とも必要である。

まず、先行節用集での旋毛の注記に着目し、『書言字考』で気形門に収載されるようになつた契機がないかを見ていくことにする。

A 「馬（ノ）（ノ）」とするもの。  
B 「人馬」とするもの。  
C この種の注記のないもの。

伊京集・節用集大全・合類節用集・頭書大益節用集綱目

A B のような注の存在は、改編意図の旺盛な編者によれば旋毛を気形門にも收める本が出現することを暗示している。そして現に、大幅な改編が認められる本の中には、気形門にも收めるものがある。たとえば、ここに引くのはふさわしくないかもしれないが、「塵芥」では「旋毛」を気形門にも收める。また、いわゆる合類

体最初の節用集『合類節用集』では「旋毛」を諸獸部にも收めるの

である。よって、門の異同については先行節用集の影響を無視でき

ないことがわかる。そこで、別の点からも先行節用集との関わりを

見ていく。まず、「回」と「廻」との選択状況はつぎのようである。

廻（＝和名抄）（塵芥）・節用集大全・広益二行節用集

回(=書言字考) 弘治二年本(天正一七年本も)・合類節用集(注記)

熟字の掲出順は次のよう<sup>注20</sup>。

廻(同)毛・旋毛(=和名抄) なし

旋毛・廻(同)毛(=書言字考) 弘治二年本(天正一七年本も)・

節用集大全・合類節用集〔旋毛又云〕・広益二行節用集(た

だし、「廻毛」は増益の部分)

また、一熟字のみ掲載のものは次のよう。

廻(同)毛(=和名抄) なし

旋毛(=書言字考) 広本(ただし「旋」)・伊京集(同)・易林本

(原刻・平井・小山の各版)・草書本・真草二行節用集(寛文二

年版など)・頭書大益節用集綱目

これらの諸特徴が先行節用集と『書言字考』とで一致して、その中でも特に「合類節用集」が多く点で一致しており、関係の深さが窺われる。よつて旋毛に関する限り、『和名抄』の影響とみるには、少なくとも先行節用集との関わりを無視できないと考えられる。

また、『和名抄』からの引用を示す出典注がないことにも注意した

い。もちろん、出典注がなくとも引用した可能性はある。が、気

形門は他の門よりも出典注の施注率が高い門であるから、注目して

よいであろう。

さらに、「書言字考」のツムジは左傍訓であることにも注意したい。

節用集に限らず左傍訓よりも右傍訓のほうが優位に立つのが普通で、それ以降(同じく「後半期」)の本が江戸語形を収載せず、

前半期の刊行ながら江戸語形を一二語も収載し、その数のうえでも

後半期の本に劣らない『書言字考』は、かなり特異な節用集である

としてよいだろう。

次にやや詳しく表を見ていただきたい。調査語の収載のされ方として、上方語形単独収載(一)、江戸語形単独収載(一)、両語形収載(+)がある。このうち、上方語形単独収載は、どの本においても他を圧倒しており、近世の節用集(の収載語)は基本的に上方語に依つてゐるとしてよい。これは、先行節用集からの書承によるのである。

また、近世における東西方言の対立という視座からは、節用集においては近世全期を通じて上方語が他の言語(方言)より優位なものとして認められていたとも見られよう。

また、両語形収載は、数の上で江戸語形単独収載よりも多く、節用集自体上方語形が圧倒的であることから、最も自然な江戸語形の収載形式であると思われる。また江戸語形を収載するとはいっても、上方語形に取つて代わつているわけではないし、恐らくは先行節用集の上方語形を継承しながら江戸語形を増補したのであろうから、依然として上方語形が中心となつてゐるものとも見られる。

上方語形の優位性がこのように目立つ中では、江戸語形単独収載は異端であり、数の上でも著しく少ないので例外的な収載形式であると思われる。その中で『江戸大節用』には七例もあつて異質である。刊行が一番遅く、それだけ江戸語の全国的伝播を反映しているのかもしれない。が、書名に「江戸」を冠していることから推測さ

——認めていたとも考えられるのである。

以上から、『書言字考』のツムジを『和名抄』からの引用とするには、先行節用集の影響を十分に考慮すべきこと、仮に引用であつたとしても規範的な語形(上方語形)として認められていたとは考えにくこと、などが明らかになった。よつて、ツムジの場合も、前までの資料からそのまま引用したとするのは妥当ではないようと思われるのである。

以上、コケラ・キス・ツムジの三語について前代までの資料から

引用した可能性を検討した。その結果、上方で使用されたことすら証明しがたいものや引用の可能性が少ないものばかりであった。ま

た、すでに調査語の選択段階で他の九語はこの点での問題はなかつた。よつて、『書言字考』は、前代までの資料からの引用ではない、

その意味で純粹の江戸語形を収載していることが明らかになつた。

#### 四 近世節用集中の『書言字考』

ここでは、まず、江戸語形の収載が『書言字考』だけの現象であるのかを検討し、同時に、近世節用集中での『書言字考』の位置付けをも考察する。

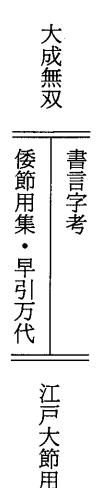
そこで、『書言字考』で調査した東西対立語の収載状況を他の近世節用集でも調査した。その結果を、江戸語形が、『書言字考』に収載される調査語(表一)、一八二〇年以後の本で収載される調査語(表二)、どの本にも収載されない調査語(表三)に三分して示した計五九語。なお、上方・江戸両語形のどちらも収載されない調査語は示さない)。

まず、大方の傾向として近世の節用集には、江戸語形を収載する

れるよう江戸語形を多く収載することで他の本にない特色を得ようとしているらしい。江戸語の台頭を示す一例としては見逃せない本ではあるが、節用集の中では特異なものであろう。

以上のことから一二本を整理し、『書言字考』の位置付けを検討していく。「一本はいずれも上方語形優勢であるから大きく一つにまとめられる。大別すれば、一八二〇年ころを境に前半期八本・後半期四本となる。後半期の本は、江戸語形の収載状況によりさらに細分されよう。『大成無双』が江戸語形の収載が少なく、『江戸大節用』が江戸語形の単独収載が目立ち、それぞれ特徴的である。結局、『大成無双』と『倭節用集・早引万代』と『江戸大節用』とに三分されよう。

この中で『書言字考』を位置付けるならば、後半期の節用集と比較検討するのがふさわしい。両語形収載が八例あることから『倭節用集・早引万代』のグループに最も近い。が、江戸語形の単独収載が四例あり例外とするにはやや多いものの、『江戸大節用』の七例には及ばないから独自のグループを成すとした。仮に図式的に示せば次のようになる。



以上のように『書言字考』は、近世前期の節用集としては特異な性格を持つおり、それ以降の本に近いことが明らかになつた。

ところで、一八二〇年以後の本が江戸語形を収載するのは江戸語

〔表三〕

\* 「海蝦」の参照注(出)字により「海蝦」をひくと「土俗或云伊勢蝦。或云鱉倉蝦」とあるが、本文3ページ上段の原則を超えるので表示しなかつた。なお、この例も含めれば、「書言学考」の上方語形収載(一)は24、上方江戸両語形収載(十)は9となる。

		表二	
		いせえび いりつけ うき（ん） た	かまくらえび
L	鄙	江宝	
乾	器	食	氣
一	—	—	—
—	—	—	—
—	—	—	—
—	—	—	—
—	—	—	—
—	—	—	—
—	—	—	—
—	—	—	—
十	一	十	十
—	—	—	—
十	+	+	+
—	—	—	—
十	+	+	+
—	—	—	—
—	—	—	—

江 江口語大辞典 前田勇編 昭和五四（一九七八）年  
刊 講談社。  
L 日本言語地図 国立国語研究所編 昭和四一（一九六六）同四九（一九七四）年刊 大蔵省印刷局。

浪	浪花聞書	編者未詳	文政二（一八一九）頃編	日
本	古典全集本。			語彙不
守	守貞漫稿	喜田川守貞著	天保八（一八三七）～嘉	
永	六（一八五三）年著	（名著刊行会の復刻本。）		
皇	京都午睡	西沢一鳳著	嘉永三（一八五〇）年成（新	
合	群書類本。）			
六	東西言葉合せ	窮食庵野立編	明治一九（一八八	
	手刊（四回目付）			語彙不

上方語形
江戸語形
収集資料
門
書言字考 1717
節用集大全 1680
合類節用集 1680
広益二行 1686
節用集綱目 1690
大成正字通 1782
大全早引 1787
絵引節用集 1796
蘭例節用集 1815
倭節用集 1826
大成無双 1849
早引万代 1850
江戸大節用 1863

凡例

- ・ 一は上方語形の収載を示す。
  - ・ 一は江戸語形の収載を示す。
  - ・ 十は両語形収載を示す。
  - ・ 空白はいずれの語形も収載されないことを示す。

これまでにない繁栄を迎えており、江戸語も重要な時期にあつたらしい。例えば、小松寿雄氏は「貞享頃『江戸言葉』という言い方が出来ることや江戸生まれの増加などから考えて、元禄頃一部に江戸共通語の前身が形成されかけていたともみられる」と推定された。<sup>注24</sup>

そして最近、この推定を支持するような資料が『江戸風俗図巻』（元禄十六年頃の成立？）として松村明氏によつて紹介された。この図巻では、一人の話者の発話の中に上方語的要素と東国語的要素とが認められ、のちの江戸語に近い構成となつてゐる。すなわち、元禄の江戸では、方言雜居の状態から洗練された言語体系（上方語と東国語との融和混濁）への移行が見られるのである。こうした新しい江戸の言語は、勢力も全国的ではなかつたであろうが、楳島昭武は江戸に在住していたため、新しい都会の新しい言葉を敏感に察知しうる状況にあり、その語彙を『書言字考』に収載したという推測も可能であろう。

しかし、当時の国語における上方語の重要性・規範性を考えるならば、いかに特殊な思想・事情が昭武にあつたにせよ、以上のような理由だけで江戸語形を収載したとは考えにくい。それに、昭武は膳所藩の右筆だったこともあり、学識も高かつたと思われる。己の思想を反映させることは言つても、当時一方言に過ぎなかつた江戸語を辞書に収載してしまるのは軽率であろう。この点についてはさらに検討を加える必要がある。

そこで、『書言字考』での江戸語形の扱い方を見ていただきたい。一二語の江戸語形は、収載のされ方によつて次のように分類される。

- (1) 参照注（参照すべき語形の所属部を示すもの）があるもの 四語
- (2) 左傍訓として収載されたもの

の台頭を反映するものと解釈されようが、享保二（一七一七）年刊行の『書言字考』ではこの解釈はあてはまらない。そこで次に、『書言字考』の江戸語形収載の要因を探ることにしたい。

## 五 『書言字考』における江戸語形収載の要因

まず、編者の側に属することから検討していく。『書言字考』の編者・楳島昭武は、「標題」末に「東武城隅賤士」、第一冊本文冒頭その他に「東武駒谷散人」とあるから、江戸に住んでいたことが知られる。彼にとつては江戸語が身近な言語であつたと推測される。

これに加えて、昭武は「言」の言語（音声言語）にも字が不可欠だとする思想を持っていたことに注意したい。

嘗聞文章者經國之大業不朽之盛事。席卷子内、囊括品物其功

魁偉其德廣遠。嗟呼於書於言日夜昏明朝野尊卑不可莫文不

可莫字。（標題 第一冊 一オ）

この思想を『書言字考』に反映させるのならば、「言」としてのみ

		支			支			支			支			
		人			人			人			人			
		衣			衣			衣			衣			
		支			支			支			支			
		計	①	十	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
37		4	8	25										
24		—	—	23										
31		—	—	30										
26		—	—	25										
28		—	—	27										
44		—	—	241										
33		—	—	32										
35		—	—	34										
41		—	—	41										
40		1	13	27										
34		1	2	32										
50		1	12	38										
47		7	18	23										

		浪合			守皇合			浪守			皇			守合		
		支			支			支			支			支		
		支	乾	支	支	乾	支	支	乾	支	支	乾	支	支	支	支
		人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人
		衣	衣	衣	衣	衣	衣	衣	衣	衣	衣	衣	衣	衣	衣	衣
		支	支	支	支	支	支	支	支	支	支	支	支	支	支	支
はえさがり		もみあげ		すそまわし		浪合		守皇合		浪守		皇		守合		
はつかけ		みづくさい		あまい												
わび		やぶいり		やどおり												
わげ		やもり		おおや												
わげ		よつじ		よつかど												
まげ		まげ		まげ												

存在する方言や俗語からも漢字を求めるような内容となろう。現に、別の箇所では「街談衝話」からも収載語を取つたとし、それにちなんで「書言字考」と名付けたようにも思われる。

一旦發懲走記誦甘糟粕彼此之交事物之觸新書舊籍街談衝話拾摭総編部類参考遂終一帙之功名曰書言字考。（同二オ）

このような發言は、近世後期の節用集ではよく見られるが、前期内のものでは管見の限りでは他には見当たらない。それは、規範性を求める使用者にとってかえつて不信感を抱かせるからであろう。ならば、この一節は正に蛇足であるが、それだけに「言」の言語への並々でない関心が窺われ、単なる誇大広告ではない編者の本音と見られよう。よつて、「言」の言語のうち、昭武にとって身近な江戸語の語彙を『書言字考』に収載した可能性は十分にあると思われる。

また、当時の江戸語の側からも検討しておこう。『書言字考』が成立・刊行された元禄・享保ごろの江戸は、先学が指摘するように、

(3) 俗注として収載されたもの

(4) その他

まず、(1)の例を次に掲げる（△内は、江戸語形・上方語形・参照語形を示す）。

① (江) 蝋牛久 （同）土牛兒全 (参1) カタツブ牛出 （同）附螺鰐 (参2) 蝋牛出 （同）加

② (江) 鱗出伊 （左訓・コケ） (参1) クラクス全上 （上）鱗也 (参2) クラクス全上 （上）鱗也

③ (江) 跳久 （同）足根也 (参1) クビズカ足根也 （同）足根也 (参2) クビズカ足根也 （同）足根也

④ (江) 紙薦鷺出伊 （同）老 (参1) イタボリ傳云為軍用韓信所造見 （同）又云鷺 (参2) 紙薦傳文雜之紀原活法 （同）又云鷺 (参3) 紙薦鳥賊幟所用 （同）又云鷺

12)の対では、双方に参照注が付されていて相互に参照しあえる。が、それ以外の、東西対立語の対では、江戸語形の方にしか参照注が付されていないのである。さらに、注や用字例が上方語形に偏在していることも併せて考えると、江戸語形は上方語形の空見出しになっていることが知られるのである。

このような、江戸語形を劣るもののように扱う編者の配慮は、タウモロコシ・ツムジが左傍訓であること、(テン)ビンバウが俗注であることにも現れているようである。こうした扱いは、当時の上方語の重要性・規範性を十分に認識してのことであり、編者の見識を示すものと解釈されよう。本稿で採り上げた一二語の江戸語形についてこのよだいがなされているわけではなく、その点は今後の考察を待たねばならないが、多くの語(一二語中六語)に施すことでの上方語形を尊重しながら江戸語形を収載することが可能となつたと考えられるのである。

以上、「書言字考」の江戸語形収載の要因や条件について検討してみた。それらを個条書きしてまとめておくところ。

(1) 編者・横島昭武が江戸に在住していたこと。

(2) 彼は、「言」の言語にも字が不可欠であると考えていたこと。

(3) 収載語の資料として「街談衢話」をも挙げていること。

(4) 江戸語の動態。

(5) 参照注の偏在などに見られるよう、上方語形重視の配慮があること。

(1)～(5)は、辞書が江戸語形を収載する際の二つの大きな制約――

上方語が君臨していた近世前期という時代上の制約と辞書に顕著な規範性・書承性という制約――を突破するためには、どれも欠けて

はならないものであろう。「書言字考」は、これらの要因の結集により江戸語形の収載に成功し、その点でも、近世前期の節用集中稀に見る特異な節用集であるとしうるのである。

## 六 おわりに

以上の検討を通して「書言字考」が、江戸語形を収載することとその要因、そのことで近世前期の節用集中で特異な位置を占めていることなどが明らかになったことと思う。これらのこととは、「書言字考」の成立過程を考察する上での一助となるであろう。また、近世前期に江戸語形を収載する節用集「書言字考」が出現したことは、その背景となる江戸語の形成のさま(新しい江戸語の弘通・勢力の獲得など)を考えるうえでの一例証ともなるかもしれない。一方では、「書言字考」中にどれだけの江戸語形があるのか、どのような微証をする語が江戸語形であるのかといった国語史・方言史研究上の利用に関してはほとんど触れなかつた。この点では、参照注・左傍訓語の総合的な研究も必要だと思う。また、本稿で見たような「書言字考」の性格が後続の節用集にどのような影響を与えていったかなど、明らかにされるべき事柄は数多い。今後に期したい。

注1 最近のものでは、飛田良文「和英語林集成の語彙の性格——江戸後期節用集との比較がら——」(文芸研究50 昭40)、鈴木丹士郎・馬琴の語彙(専修国文1 昭42)、中田祝夫・小林祥次郎「書言字考節用集研究並びに索引」(風間書房 昭48)。以下、「書言字考研究索引」と略す)

注2 「書言字考研究索引」のほか、前田富祺「語彙研究資料としての節用集」

コケ鱗は後期江戸語の口語(的)資料にもよく見られ、ヒコ曾孫(本文稿では割愛)も江戸者の手になる文語にまで現れるから、当時においても有力な語形を収載した可能性はある。

注8 主なものに、峰谷清人「天正狂言本」における語法の一考察——東國語の特徴に関する問題を中心に——(共立女子大学紀要17 昭46)、迫野虔徳「東国文献と言語指標——天正狂言本における【借りる】をめぐって——」(北九州大学文学部紀要7 昭46)など。

注9 前田富祺「いろこ」と「いろいろ」(国語学61 昭40)、国語語彙研究(明治書院 昭60)再録によれば、寛永七・九・一五年版「和

玉篇」や同二年版「大広益会玉篇」にコケラの訓もあるといふ。ただし、同氏は近世前期の他のコケラの用例を挙げられないことから、私見では「和玉篇」「大広益会玉篇」の方に問題があるように思われる。

注10 山田忠雄「節用集と色葉字類抄」(本邦辞書史論叢 三省堂 昭42 715～718ページ)。

注11 「書言字考」もキスゴを付すことがある(第五冊四一オ「鱗」の注)が、これも稿本ではキスである(「書言字考研究索引」)。また、「書言字考」では「鱗」の右にキ、「残魚」の中間右にスを付しごの誤脱は考えられない。

注12 広本・伊京集・饅頭屋本・弘治二年本(天正一七年本も)・永禄二年本・嘉空本・経亮本・枳園本などでは、「鱗」が見られ定訓なのかもしない。ならばいよいよ「鱗」は何を指すのか理解に苦しむ。また静嘉堂文庫本・元龜二年本とも「鱗」のあと一語置いて「<sup>サヨリ</sup>鱗」を掲げているのも無批判的であろう。

注13 「十斑魚 めだか〇東武にて〇めだか京にて〇めゝざい」(中略)和泉にて〇めたばり同国境及近江因幡越前に〇めゝじやん」(卷之一一二ウ。傍縞は引用者)。

注14 なお、辛川十歩・柴田武「メダカ乃方言」(未央社 昭55)によれば、

注6 ①中田祝夫「恵空編節用集大全研究並びに索引」(勉誠社 昭50)、  
②中田・小林祥次郎「合類節用集研究並びに索引」(同 昭54)、⑧鈴木博「蘭例節用集文化二年」(臨川書店 昭43)。「書言字考」は「書言研究索引」を用いた。その他は東北大学附属図書館および狩野文庫蔵本によつた。なお、以下では、各本とも略称することがある。

注7 「書言字考」がどのような理由で表一の一二語を収載したのかは不明である。あるいは、後述のような元禄・享保頃の新しい江戸の言語の語彙にあつたからとも考えられるが、確かなことは言えない。ただ、

- キスが千葉県木更津市・長野県大町市・同南安曇郡・三重県安芸郡にある。他にギス(愛知県海部郡七宝町)・キスツコ(千葉県君津郡・長野県南安曇郡)・ギスツコ(長野県小県郡)もある。キス麺<sup>11</sup>も高もありえない。
- <sup>12</sup> 森昇一「静嘉堂文庫藏本運歩色葉集の語法」(文学語学27昭38)。他に、迫野虔徳「元龜二年本運歩色葉集」(国語国文42-7昭48)など。
- <sup>13</sup> 小林隆氏も同様のお考えである(注3の小林論文参照)。ツムジの例、「東南院文書」(「奴婢見来帳」「東大寺奴婢籍帳」)・本文に掲出した古辞書など。ツジの例、「名語記」四・「常徳院殿様御馬召初めらるゝ事」・「狂言六義」巻之一・「本朝食鑑」一一・「諸艶大鑑」巻二など。他に古辞書など。
- <sup>14</sup> 注2、高梨論文④65ページ。
- <sup>15</sup> 注2、湯浅論文237ページ。
- <sup>16</sup> 上田万年・橋本進吉「古本節用集の研究」(東京帝国大学文科大学紀要2 大5) 118ページ。
- <sup>17</sup> ただし、「和名抄」は「爾雅注」からの引用なので、掲出順を考える際には割り引く必要があるかもしれない。が、廻毛を頭出(あるいは見出し化)するので次項とも関わりのあるものとして取り上げておく。
- <sup>18</sup> 注21、高梨論文④63ページ。
- <sup>19</sup> 各地の方言語形を注で示す場合などにも上方語形の優位性が見られる。「玉蜀黍<sup>13</sup> 東国にててたう／もうこし／にてたう／西國北國／きびと云」(倭節用集二六三)オ「紙鳶<sup>14</sup> 中国の称也関東／タコといふなり」(早引万代二)オ。この種の注は上方語形だけに見られ江戸語形ではない。これは、他の方言語形を示す際の基準となる語形が上方語形であることを示していよう。
- <sup>20</sup> 注23、東北大附属図書館・同狩野文庫蔵本などの範囲。

——東北大学大学院生——  
(昭和六十一年九月十日 受理)  
(昭和六十一年十月二十九日 改稿受理)

- ・「中世古辞書四研究並びに索引」(元龜二年運歩色葉集)「天正一七年本運歩色葉集」(諸国物類称呼 本文・訳文・索引)「清原宣賢自筆伊塵芥」(諸集僕名類聚抄)
- \* 紙数の都合で「資料」は書名だけ示した。

- [付記]本稿は、昭和61年5月25日国語学会春季大会研究発表会の発表資料に加筆したものである。会場その他の御教示いただいた先生方に厚く御礼申し上げます。また成稿まで種々御指導いただいた加藤正信先生・佐藤武義先生・小松寿雄先生に深謝申し上げます。

- <sup>21</sup> 注17、吉田澄夫「近世語と近世文学」(東洋館出版社 昭25)、松村明「戸語東京語の研究」(東京堂 昭32)、金田弘「江戸語と関東方言」(国語と国文学36・10 昭34・10)、杉本つとむ「近代日本語の成立」(接楓社 昭35初版 昭36改訂新版)、同「日本語再発見」(社会思想社 昭45)、同「近代日本語」(紀伊國屋書店 昭56)など。
- <sup>22</sup> 注18、「江戸語の形成」(松村明教授国語学と国語史)明治書院 昭52)518ページ。
- <sup>23</sup> 注19、「日本語の世界2 日本語の展開」(中央公論社 昭61)41-46ページ。
- <sup>24</sup> 注20、「御いんきよよさまちと御やすみ遊はせ」道はおたつしゃなど。(傍線上方的なもの、傍点東国的なもの。前掲書42ページ)など。
- <sup>25</sup> 注21、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>26</sup> 注22、「書言研究索引」25ページ上段など。筆者の予備的な調査でも、門によって異なるようだが、相互参照の対六~八・偏在の対四~二程度であった。
- <sup>27</sup> 注23、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>28</sup> 「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>29</sup> 「書言研究索引」25ページ上段など。筆者の予備的な調査でも、門によって異なるようだが、相互参照の対六~八・偏在の対四~二程度であった。
- <sup>30</sup> 注24、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>31</sup> 注25、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>32</sup> 注26、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>33</sup> 注27、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>34</sup> 注28、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>35</sup> 注29、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>36</sup> 注30、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>37</sup> 注31、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>38</sup> 注32、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>39</sup> 注33、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>40</sup> 注34、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>41</sup> 注35、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>42</sup> 注36、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>43</sup> 注37、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>44</sup> 注38、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>45</sup> 注39、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>46</sup> 注40、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>47</sup> 注41、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>48</sup> 注42、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>49</sup> 注43、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>50</sup> 注44、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>51</sup> 注45、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>52</sup> 注46、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>53</sup> 注47、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>54</sup> 注48、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>55</sup> 注49、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>56</sup> 注50、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>57</sup> 注51、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>58</sup> 注52、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>59</sup> 注53、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>60</sup> 注54、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>61</sup> 注55、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>62</sup> 注56、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>63</sup> 注57、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>64</sup> 注58、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>65</sup> 注59、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>66</sup> 注60、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>67</sup> 注61、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>68</sup> 注62、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>69</sup> 注63、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>70</sup> 注64、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>71</sup> 注65、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>72</sup> 注66、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>73</sup> 注67、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>74</sup> 注68、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>75</sup> 注69、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>76</sup> 注70、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>77</sup> 注71、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>78</sup> 注72、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>79</sup> 注73、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>80</sup> 注74、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>81</sup> 注75、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>82</sup> 注76、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>83</sup> 注77、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>84</sup> 注78、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>85</sup> 注79、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>86</sup> 注80、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>87</sup> 注81、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>88</sup> 注82、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>89</sup> 注83、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>90</sup> 注84、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>91</sup> 注85、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>92</sup> 注86、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>93</sup> 注87、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>94</sup> 注88、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>95</sup> 注89、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>96</sup> 注90、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>97</sup> 注91、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>98</sup> 注92、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>99</sup> 注93、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>100</sup> 注94、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>101</sup> 注95、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>102</sup> 注96、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>103</sup> 注97、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>104</sup> 注98、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>105</sup> 注99、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>106</sup> 注100、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>107</sup> 注101、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>108</sup> 注102、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>109</sup> 注103、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>110</sup> 注104、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>111</sup> 注105、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>112</sup> 注106、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>113</sup> 注107、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>114</sup> 注108、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>115</sup> 注109、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>116</sup> 注110、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>117</sup> 注111、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>118</sup> 注112、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>119</sup> 注113、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>120</sup> 注114、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>121</sup> 注115、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>122</sup> 注116、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>123</sup> 注117、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>124</sup> 注118、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>125</sup> 注119、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>126</sup> 注120、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>127</sup> 注121、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>128</sup> 注122、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>129</sup> 注123、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>130</sup> 注124、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>131</sup> 注125、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>132</sup> 注126、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>133</sup> 注127、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>134</sup> 注128、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>135</sup> 注129、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>136</sup> 注130、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>137</sup> 注131、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>138</sup> 注132、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>139</sup> 注133、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>140</sup> 注134、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>141</sup> 注135、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>142</sup> 注136、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>143</sup> 注137、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>144</sup> 注138、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>145</sup> 注139、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>146</sup> 注140、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>147</sup> 注141、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>148</sup> 注142、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>149</sup> 注143、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>150</sup> 注144、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>151</sup> 注145、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>152</sup> 注146、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>153</sup> 注147、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>154</sup> 注148、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>155</sup> 注149、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>156</sup> 注150、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>157</sup> 注151、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>158</sup> 注152、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>159</sup> 注153、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>160</sup> 注154、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>161</sup> 注155、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>162</sup> 注156、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>163</sup> 注157、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>164</sup> 注158、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>165</sup> 注159、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>166</sup> 注160、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>167</sup> 注161、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>168</sup> 注162、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>169</sup> 注163、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>170</sup> 注164、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>171</sup> 注165、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>172</sup> 注166、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>173</sup> 注167、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>174</sup> 注168、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>175</sup> 注169、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>176</sup> 注170、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>177</sup> 注171、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>178</sup> 注172、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>179</sup> 注173、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>180</sup> 注174、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>181</sup> 注175、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>182</sup> 注176、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>183</sup> 注177、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>184</sup> 注178、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>185</sup> 注179、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>186</sup> 注180、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>187</sup> 注181、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>188</sup> 注182、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>189</sup> 注183、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>190</sup> 注184、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>191</sup> 注185、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>192</sup> 注186、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>193</sup> 注187、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>194</sup> 注188、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>195</sup> 注189、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>196</sup> 注190、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>197</sup> 注191、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>198</sup> 注192、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>199</sup> 注193、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>200</sup> 注194、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>201</sup> 注195、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>202</sup> 注196、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>203</sup> 注197、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>204</sup> 注198、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>205</sup> 注199、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>206</sup> 注200、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>207</sup> 注201、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>208</sup> 注202、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>209</sup> 注203、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>210</sup> 注204、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>211</sup> 注205、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>212</sup> 注206、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>213</sup> 注207、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>214</sup> 注208、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>215</sup> 注209、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>216</sup> 注210、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>217</sup> 注211、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>218</sup> 注212、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>219</sup> 注213、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>220</sup> 注214、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>221</sup> 注215、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>222</sup> 注216、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>223</sup> 注217、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>224</sup> 注218、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>225</sup> 注219、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>226</sup> 注220、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>227</sup> 注221、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>228</sup> 注222、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>229</sup> 注223、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>230</sup> 注224、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>231</sup> 注225、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>232</sup> 注226、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>233</sup> 注227、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>234</sup> 注228、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>235</sup> 注229、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>236</sup> 注230、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>237</sup> 注231、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>238</sup> 注232、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>239</sup> 注233、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>240</sup> 注234、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>241</sup> 注235、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>242</sup> 注236、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>243</sup> 注237、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>244</sup> 注238、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>245</sup> 注239、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>246</sup> 注240、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>247</sup> 注241、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>248</sup> 注242、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>249</sup> 注243、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>250</sup> 注244、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>251</sup> 注245、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>252</sup> 注246、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>253</sup> 注247、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>254</sup> 注248、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>255</sup> 注249、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>256</sup> 注250、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>257</sup> 注251、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>258</sup> 注252、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>259</sup> 注253、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>260</sup> 注254、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>261</sup> 注255、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>262</sup> 注256、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>263</sup> 注257、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>264</sup> 注258、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>265</sup> 注259、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>266</sup> 注260、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>267</sup> 注261、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>268</sup> 注262、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>269</sup> 注263、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>270</sup> 注264、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>271</sup> 注265、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>272</sup> 注266、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>273</sup> 注267、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>274</sup> 注268、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>275</sup> 注269、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>276</sup> 注270、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>277</sup> 注271、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>278</sup> 注272、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>279</sup> 注273、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>280</sup> 注274、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>281</sup> 注275、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>282</sup> 注276、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>283</sup> 注277、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>284</sup> 注278、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>285</sup> 注279、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>286</sup> 注280、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>287</sup> 注281、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>288</sup> 注282、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>289</sup> 注283、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>290</sup> 注284、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>291</sup> 注285、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>292</sup> 注286、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>293</sup> 注287、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>294</sup> 注288、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>295</sup> 注289、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>296</sup> 注290、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>297</sup> 注291、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>298</sup> 注292、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>299</sup> 注293、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>300</sup> 注294、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>301</sup> 注295、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>302</sup> 注296、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>303</sup> 注297、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>304</sup> 注298、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>305</sup> 注299、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>306</sup> 注300、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>307</sup> 注301、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>308</sup> 注302、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>309</sup> 注303、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>310</sup> 注304、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>311</sup> 注305、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>312</sup> 注306、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>313</sup> 注307、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>314</sup> 注308、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>315</sup> 注309、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>316</sup> 注310、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>317</sup> 注311、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>318</sup> 注312、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>319</sup> 注313、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>320</sup> 注314、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>321</sup> 注315、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>322</sup> 注316、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>323</sup> 注317、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>324</sup> 注318、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>325</sup> 注319、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>326</sup> 注320、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>327</sup> 注321、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>328</sup> 注322、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>329</sup> 注323、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>330</sup> 注324、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>331</sup> 注325、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>332</sup> 注326、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>333</sup> 注327、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>334</sup> 注328、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>335</sup> 注329、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>336</sup> 注330、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>337</sup> 注331、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>338</sup> 注332、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>339</sup> 注333、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>340</sup> 注334、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>341</sup> 注335、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>342</sup> 注336、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>343</sup> 注337、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>344</sup> 注338、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>345</sup> 注339、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>346</sup> 注340、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>347</sup> 注341、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>348</sup> 注342、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>349</sup> 注343、「書言研究索引」(8~9ページ)。
- <sup>350</sup> 注344